

学校番号	24	学 校 名	静岡県立伊豆の国特別支援学校	校 長 名	松本仁美
------	----	-------	----------------	-------	------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
安全・安心 ①	児童生徒が安全に安心して生活できる学習環境の整備や危機管理体制を構築する。	緊急時や災害時の職員の役割や動きを理解し、適切に対応できた。	訓練や反省に基づいたマニュアルの改訂を行った。緊急時や災害時の職員の役割や動きを理解し、適切に対応できた。 実施できた教員 94%	A	基本的な体制とマニュアルを踏まえ、訓練を実施できた。今後も様々な場面を想定し、実効性の高い訓練を重ね、対応力をつけていく。防災では、地域との連携を検討中。今後、避難所の締結や、地域住民と合同の訓練実施する予定。
		児童生徒が自分で身を守るための安全教育を実施した。	訓練の教材の工夫や、外部講師を招いたり児童生徒の実態に応じて体験的な内容を取り入れたりして安全教育を実施した。 実施できた教員 99%	A	児童生徒が落ち着いて訓練を実施し、意欲的に防災教育に取り組んでいる。それにより自分で身を守る力が身についている。引き続き、防災教育の内容や教材を充実させていく。安全や防犯についても、地域との連携を意識して取り組んでいく。
		校舎内や地域の危険場所の確認や改善を行うKY（危険予知）ミーティングを、各学期初めに全職員縦割りで年3回実施した。	KYミーティングを年2回実施し、危険箇所や情報を共有した。 （二学期は感染症対策のため中止） 実施できた教員 95%	A	KYミーティングを通して、危険予知と回避に向けた意識作りができた。 3年間のKYミーティングの情報を取りまとめ活用していくとともに、引き続き、来年度以降も児童生徒の実態や時期により起こる危険の違いなどにも視点を置いて、危険予知情報の確認と共有を継続していく。
		安全点検を実施後の対応を100%実施した。	毎月の安全点検を実施。可能な範囲で、対応や改善をし、情報共有した。 実施できた教員 95%	A	点検後は事務と連携して改善し、事故防止や安全意識をもつことができた。大きな事故はなかった。引き続き、毎月の安全点検以外にも、ヒヤリハット事例からの対応や改善等、迅速に対応と情報共有できる体制を継続していく。
安全・安心 ②	児童生徒一人一人の人権が尊重され、いきいきと活躍できる教育活動を実施する。	学部会でミニ人権講座を実施した。	全体で外部人材を招聘しての人権研修や学部でミニ講座を実施した。 実施できた教員 96%	A	自己チェックや研修を行うことで、人権を大切に指導することができた。学部会の小集団での話し合い形式の研修は、人権意識の維持や向上に有効だった。 人権感覚は常に意識していくものであり、今後も継続的に取り組みを続けていく。
		3分間セルフチェックで毎月、人権感覚チェックを実施した。	毎月、人権自己チェックを実施した。 実施できた教員 90%	A	チェックが形骸化しない工夫や項目の見直し、人権感覚について気づきを言い合える職場環境づくりに取り組んでいく。

様式第3号

		児童生徒一人一人に合ったコミュニケーション方法を学年や学部で共有した。専門家による指導助言を年2回、夏季研修会等、研修の場の充実に努めた。	学年や学部で、一人一人にあったコミュニケーション方法の検討や共有を行った。大学教授による指導助言を年2回、夏季テーマ別研修ではコミュニケーション関係の研修を実施した。実施できた教員96%	A	児童生徒の思いを受け止め寄り添う支援を目指して、コミュニケーション方法等の検討や共有を行うことができた。事例検討や大学教授による指導助言は、すぐに取り組める指導や専門的な知識、新たな視点が得られ、校内や保護者とも共有することで有効だった。来年度はコミュニケーション指導を含め、自立活動の時間の確保や内容の理解と充実に取り組む。
専門性①	新学習指導要領に沿った12年間のつながりのある教育課程を実施する。	実践の成果を共有し、次年度に向けてカリキュラム・マネジメントシートとシラバスの見直し改善を12年間のつながりの視点で行い、教員間で共通理解をした。	今年度は、1・2学期中にもカリキュラム・マネジメントシートとシラバスの見直し改善を実施した。年度末には、各学部の課題にそって、次年度に向けた見直しを実施した。系統性を意識したカリマネという共通理解ができていた。実施できた教員92%	A	開校から3年間の学習活動と反省を踏まえ、学部や12年間の系統性をおさえることや、全教員が参加する必要性など、カリマネについて理解を深めることができた。まだ12年間のつながりや全教科のカリマネの見直しまでには至っていない。今後も毎年カリマネの見直しと改善は続けていく。カリマネの検討が効率的に行えるための、検討目的や視点の共有などの検討方法の工夫していく。
		シラバスの達成に必要な教材教具を整えた。	1・2年目にそろわなかった教材教具を優先順位を踏まえながら、順次整えた。実施できた教員89%	B	3年間で、必要最低限の教材教具をそろえた。まだ図工美術・音楽・体育の教材教具で必要なものがある。開校時に他校から譲渡された教材教具の中には、新規購入が必要なものも出てきている。来年度に向けた予算ヒヤリングを実施し、予算執行の中で必要な教材教具を全校の視野とシラバスを踏まえて整えていく。
専門性②	児童生徒の適切な実態把握と課題設定により、確かな学びを積み上げる国語・算数(数学)の授業実践力の向上を図る。	ラーニングマップによる児童生徒の学習状況の評価を年間3回行い、国語・算数・数学の授業で、児童生徒が何を学んだのかを明らかにした。	ラーニングマップを活用して、個々の学習状況を把握し、適切な指導目標と指導内容を設定した授業実践を積み重ねた。児童生徒の学習状況の評価を年間3回行い、国語・算数・数学の授業で、児童生徒が何を学んだのかを明らかにした。実施できた教員96%	A	3年目も引き続きラーニングマップを全校統一の実態把握の指標として活用したことは、専門性向上に有効だった。学習評価に基づく授業改善の充実に向けた研修や、一人1授業研究を行い、授業力の向上を図ることができた。1月の公開授業研究会では、全員が国語・算数(数学)の授業公開を行った。3年間の取り組みから、授業デザインシートや教材集等をデーター

					ベース化した。今後はそれらの授業実践の蓄積を有効活用し、効率的に継続していく。
専門性 ③	将来の生活を豊かにするためのキャリア教育のあり方を考える。	全職員が、なぎのはプランを共有し、キャリアの視点で見直す事ができた。教職員向け進路研修や高等部見学を実施した。	なぎのはプランをもとに、学部で目指す児童生徒像を共通理解し、12年間のつながりから、キャリア教育を考える機会を持った。進路研修や情報提供、施設先や高等部の見学を通して、意識を高めた。(高等部見学は2月に実施) 実施できた教員 89%	B	小学部・中学部・高等部段階で大切にすることを、なぎのはプランを基に共通理解する機会をもった。12年間のつながりを意識した上で、進路研修や進路情報の提供、施設先や高等部の見学をすることは、将来の豊かな生活を見据えたキャリアの視点を考えるうえで有効だった。 社会や進路先が多様化する中で、キャリア教育のあり方について、情報提供や問題提起など、話題にする機会をもっていく。
連携 ①	児童生徒の良さと本人・保護者の将来の願う姿を共有する個別の教育支援計画、個別の指導計画（以下、伊豆の国書式個別）に基づき、保護者・関係機関との連携を図る。	児童生徒の良さを学校と保護者で共有し、伸ばすことができた。伊豆の国書式個別を保護者や関係機関との連携に活用した。	よさや長所の共有を意識した目標設定や面談を実施した。保護者や関係機関との情報共有と連携に活用した。 実施できた教員 94%	A	伊豆の国書式個別の作成と共有において、よさや長所を大切にすることは根付いている。 開校より3年間、研修や改善をして活用してきた伊豆の国書式個別について、教員にアンケートを実施した。結果や意見を踏まえ、今後の活用の方針を整理している。 来年度はその方針を踏まえ、年度初めに学年主任を中心とした研修を実施し、それらの意味や意図、使い方のおさえを確認する。 引き続き、保護者や連携に活用した関係機関（放ディ・病院等）からの意見を参考にし、活用方法等、保護者や関係機関との効果的な情報共有の方法を探っていく。
連携 ②	積極的に地域と関わり、学校や児童生徒について、地域への理解啓発を図る。	地域資源を活用した学習を目的を意識して計画・実施した。	コロナの制約緩和を受けて、児童生徒の地域での学習の機会や交流の相手、活躍場面を、目的を整理しつつ計画・実施した。 地域での学習の機会を増やすことができた。 実施できた教員 96%	A	学習目的を整理して、1・2年目にコロナ禍で実施した地域資源を活用した学習の場や交流相手を再検討したり、新規に取り組みや開拓をしたりすることができた。地域の理解の広がりも実感できた。 まだ地域への認知が十分とは言えない。4年目からは、「地域に知ってもらおう・地域とやってみる」から、「地域と共に歩む」の視点で学習を計画・実施し、地域住民との協働や地域への貢献を意識した学校づくりを目指していく。
		ホームページ、学校だより、児童生徒の作品等で、情	ホームページの構成やレイアウトをリニューアルした。		ホームページのリニューアルは好評であった。 ホームページ・おたより配布・新

様式第3号

		報発信をした。	二週間に1回更新以上のペースでホームページを更新した。(4月より1月末現在:150回更新) 実施できた教員 96%	A	聞掲載等、児童生徒の日頃の学習活動や作品、地域学習の様子を地域に情報発信し、地域への認知度を向上することができた。 情報発信では、今後はおたよりの配布・掲示先を、近隣地域から学区の市役所やスクールバス停などに拡大していく。
連携③	外部機関や有識者と連携し、社会の変化に合わせた学校の担う役割について考える。	学校運営協議会、就業促進協議会等を開催し、得られた助言や情報を、会議等で共有した。	学校運営協議会、就業促進協議会等を開催し、情報を共有した。学校の役割について話題にした。 実施できた教員 94%	A	社会の変化に応じた学校の役割やキャリア教育のあり方について、会議で話題にしたり、外部の方から意見を得て共有したりすることができた。 その情報を校内の職員間で話題にしたり考えたりする意識の向上や時間の捻出をしていく。
チーム学校①	教職員一人一人がやりがいを持ち学校づくりへ参画する。	学年部会・学部会・分掌部会・主任会等で提案したり、提案について話し合ったりすることができた。	学年部会・学部会・分掌部会・主任会等で出た個々の意見や提案を吸い上げ、話し合うことができた。 実施できた教員 93%	A	事前に意見を募ったり、小集団での話し合いの場を持ったりした。発言や提案、話し合いをしやすい工夫や雰囲気づくりは効果をあげている。 今後も、限られた時間の中で、有効な提案や話し合いができるための、会議の進行方法や事前準備の工夫を検討し、取り入れていく。
		管理職との面談等で、自身が学校づくりで力を発揮したいことや、自分の得意分野を伝えることができた。	面談等で、よさや強み、学校運営への抱負、自分の役割、今年度の成果と今後の自身の課題等を伝えることができた。 実施できた教員 95%	A	教職員一人一人が、自分のよさや強みを自覚し、学校運営に参画したい・この成果を上げたという気持ちを持つことができた。 引き続き、やりがいと働き方改革を両立できる職場環境づくりを検討していく。